

市民公益活動団体紹介

市民のみなさんが積極的にボランティア活動やNPO活動に取り組むことができるよう、市に登録された市民公益活動団体の情報を掲載しています。

問合せ 自治振興課

泉州つむぐ会

泉州つむぐ会は、地域社会福祉貢献を目的とした福祉活動を行っている市民団体です。介護、医療、終活の専門スタッフが、様々な福祉相談に応じたり、毎月第2日曜日に開催しているオレンジカフェつむぐでは、音楽療法を積極的に取り入れ、認知症の予防緩和改善に取り組んでいます。また人生100年時代を迎えようとしている今日、終末の人生を楽しむアドバイザーと一緒に考えていきます。

そのほか、福祉イベントを開催したり、地域コミュニティ紙上での福祉相談も始まりました。

こういった泉州つむぐ会の活動がJ・COMテレビや読売新聞でも紹介されましたが、これからも泉州つむぐ会では、「共に生きていく共生」をテーマに、地域に集い憩いの場を提供していきたいと思えます。

「オレンジカフェつむぐクリスマス会」

楽しい催しや素敵なスペシャルライブなど盛り沢山！

日時 12月13日(日) 午前10時～

場所 ライブハウスオレンジハウス (羽倉崎3丁目10番32号)

定員 15人 (先着順)

申込・問合せ先 泉州つむぐ会

●080-5311-0016 (辻下)
●090-8886-2793 (宮崎)
●090-8480-4499 (板倉)



▲昨年のクリスマス会の様子

※市民公益活動団体については、市のホームページ (<http://www.city.izumisano.lg.jp/>) をご覧ください。

モンゴルでの隔離体験

問合せ 自治振興課

モンゴルは中国と世界最長の陸の国境を接している内陸国ですが、10月20日時点で新型コロナウイルス感染症の感染者数が320人、回復者数が311人、死亡者数が0人です。確認された症例は、すべて国外からの輸入症例です。モンゴル国内で市中感染が発生していない大きな理由は、入国者にモンゴル到着後病院やホテルなどで3週間の隔離が義務付けられており、複数回にわたりPCR検査が行われている

からです。では、私が母国で隔離された経験について述べたいと思います。国外にいる帰国希望者のために、モンゴル政府が臨時のチャーター便を成田から飛ばしていますが、チャーター便に乗る前に手袋と防護服で全身をカバーした客室乗務員にマスクを変えさせられ、席に案内されます。名前やモンゴルでの住所、連絡先、席番などを記入後、パスポートを取り上げられました。その後、また、2回ほど熱を測りました。

ウランバートルに到着後、名前が呼ばれるまで席を立たないよう注意され、呼ばれた人が手や携帯や手荷物(預け荷物は到着3日後、家族に渡されました)を

消毒してもらってから指定のバスに乗り、パトカーの先導で隔離先の病院へと移動しました。260人が一人ひとり呼ばれるので、ものすごく時間がかかり、病院に着いたのは夜中。そこで名前が呼ばれた人から部屋に案内されました。私の部屋は4人部屋でした。隔離中は1日に3食出ましたが朝食はスープやパンなど、お昼は肉中心の料理、夕食はスープでした。メニューが重なることはありませんでしたが、モンゴル料理といえば肉が多いので、夕食は食べられない日がほとんどでした。食事代込みの隔離費用として一人一日に50,000トゥグルグ(日本円で約1,900円)支払いました。

検査について、到着翌日にPCR検査、10日目に血液検査、19日目にまたPCR検査を受けました。モンゴルでは毎日午前11時にコロナウイルス状況のニュースが生放送されていますが、自分の検査結果をニュースで見えていました。結果は陰性でした。また、隔離中は部屋から出ることはできません。部屋の対応は手袋やマスクや防護服で全身をカバーした2人の医者のみでした。ドアは外から鍵がかかっている、何かあったら中からノックして先生を呼んでいました。病院にカメラが設置されているので、担当の先生が時間外に勝手にドアを開けることも難しいとのことでした。

誰にでも体験できない隔離の感想ですが、故郷に来ているのに、まるで危険なウィルスのような扱いをされたのが寂しく、でも「この時期に厳しくしているからこそ、国内でウィルスが発生していないのだな」と納得しました。

「世界が一日でも早く普通の生活に戻り、マスクなしで街を歩ける日が来るように」と心から願うばかりです。

今月のモンゴル語

төрсөн нутаг (トゥルスノタグ) : ふるさと
гэр бүл (ゲルブル) : 家族



▶朝食



◀隔離部屋での検査の様子

▶国際交流員のオギー

